

教室でいきる自立活動の時間の指導実践

—テーマの設定による教室場面と自立活動の時間の指導とのつながりを意識した授業実践—

○城戸宏則 杉林寛仁 村主光子 佐々木高一 岡崎志乃 川間健之介

I. はじめに

当校では「教室でいきる」自立活動を目指して実践を積み重ねてきた。

自立活動の「時間の指導」では、指導目標や指導内容やその評価が「時間の指導」の中だけで、完結してしまう傾向がある。例えば、肢体不自由児の自立活動の「時間の指導」では、以下のような指導目標が立てられることが多い。

- ・ 運動・動作の改善, 習得
- ・ 筋力の維持, 強化
- ・ 拘縮, 変形の予防
- ・ 可動域を広げる
- ・ さまざまな姿勢の保持
- ・ 呼吸, 排痰, 嚥下の促進
- ・ 触感覚や運動感覚を整える
- ・ 認知発達の向上等

これらの指導目標はそれぞれに欠くべからざるものではあるが、指導者にとっても、児童生徒にとっても、これらの指導目標からだけでは、学校生活の日常場面や学習場面への繋がりをイメージしながら、「自立活動の時間の指導」に取り組むことが難しい。

そこで当校では、自立活動の「時間の指導」と学校生活の日常場面や学習場面とが結びついてサイクルするために、「時間の指導」において「テーマ」を設定して、「教室でいきる」自立活動を目指してきた(図1)。「テーマ」は当校独自で設定した次の4つの自立活動で育てたい力を基に、発達段階や各グループの持つ課題に対して、時期に応じて「自立活動プロジェクト」が中心となり、さらに細かく設定した。

1. 自分の健康の状態, 身体の状態, 認知の特性について知る。(自分)
2. 物理的環境や人的環境, 活動内容が変化しても対応できる方法を知る。(環境)
3. 1日や1週間の流れの見通しをもって, 自分に合った過ごし方を計画できる。(時間)
4. その時に必要な情報を選び取って, 自分に役立てる方法を知る。(情報)

「テーマ」を設定することで「時間の指導」の評価や効果測定は学校の生活場面や学習場面でも行われるようになり、教員も児童生徒も「教室でいきる」自立活動の実践に向かうことができた。

本稿では小学部, 中学部, 高等部のそれぞれの学部で各部の特色をいかした「テーマ」を設定した自立活動の指導の実際について報告する。

(文責 城戸宏則)



図1 テーマ設定による学習のイメージ

Ⅱ. 実践事例1 小学部—「基本姿勢・学習姿勢」をテーマにした小学部の実践事例—

1. 対象：小学2年生 脳性まひ

学校生活は補装靴をはいて主に独歩で移動。学習は当該学年の基礎的目標・内容に重点をおいて学習している。学習時は座位保持椅子を使用しているが、骨盤が後傾しやすく姿勢も崩れやすい。自己の身体への意識がまだ薄く、動きのぎこちなさがある。姿勢を整えようとする、背中が丸まったままで、あごが上がりやすい。

2. 自立活動の目標

個別の指導計画でおさえられた自立活動の時間の指導における目標は以下の通りである。

- (1) 学習に必要な基本的態度を身につける。
- (2) 身体の意識を高める。
- (3) 視覚情報処理や目と手の協応動作の力を高める。

※週3時間の指導の内、筆者は週1時間(1)(2)を中心に担当

3. 指導の流れ

(1) テーマの設定

小学部段階は、自分の身体への気づきを高め、それを基盤として身の回りの生活力を広げていく段階で、特に低学年は学習に必要な基本的態度の育成が大切である。そこで「自立活動で育てたい力」の1を拠り所とし、対象児の目標及び教室場面での活動の様子から「基本姿勢・学習姿勢」をテーマに身体の学習と合わせて展開した(表1)。

表 1 時間の指導における主な学習内容

	学習内容
テーマ学習	<ul style="list-style-type: none"> ○学習時及び床での姿勢の写真をもとに、自分や友達の姿勢について気づいたことを発表しあう（写真1）。 ○どこがどんな風になるとよいか考える。 ○定期的に写真を撮り、前回の様子と比較する。
身体の学習	<ul style="list-style-type: none"> ○緊張のコントロールの学習 ○足首、腰、体幹を中心に臥位、座位、立位姿勢で学習する ○椅子座位で踏みしめて座る学習 ○腰・背中の動きの学習 ○授業の前後で特定の姿勢の比較



写真 1 普段の自分たちの姿勢について話し合う様子

(2) 指導の経過

(テーマ学習)

最初の時間は学習時の姿勢や床での座位・立位姿勢の写真を見て、友達同士で気づいたことを発表し合った。写真には水平と垂直に基準となる線を入れてある物を使用した。対象児は友達の発言にも影響され、学習時は背中が丸まっていることが多く、号令の際の姿勢を整える場面では、あごが上がり、背中丸いままであることなどへの気づきが見られた。また、床でのあぐら座位の姿勢から、同じように背中が丸まりやすい点や左に身体が傾いていることなどを指導者と共有した。

次にどこがどうなるとよいかについて指導者と一緒に相談した。検討の材料に前年度同時期に撮った写真も使用した。そこで対象児は左右の偏りや背中丸みが、「号令でお尻から背中と頭までまっすぐにできるようにする」ことを目標にした。

身体の動きの学習を一定期間進めた後、定期的に学習姿勢の評価を一緒に行った。学習時の姿勢に変化はあまり見られなかったが、号令の際の背中の伸ばし方が以前に比べ改善した。対象児も始めの頃の写真と比較し、変化を喜ぶ発言が見られた。

(身体の動きの学習)

学習時の姿勢及び床での姿勢の取り方の分析から、足首・股関節、腰回りのリラクゼーションと腰・背中の動きの学習に取り組んだ。自己の身体の状態に注目し、足首や股関節

は指導者の動きに合わせて動かしたり、余計な力を抜いたりする自己コントロールの力が上達した。

腰と背中を伸ばす動きの学習では、少しずつ上達は見られるものの、援助の動きがないと難しい様子であった。一方で、足裏で踏みしめたり椅子座位でお尻でしっかり座ったりする感覚が高まったと評価した。

(3) 教室での指導の経過

教室場面での指導において、姿勢を整える際に「足裏ピタ・お尻重くして・頭のとっぺんで天井を押す」を学級全体の合い言葉にして始業時などに取り入れた。本時も足裏をつけ、お尻の起点に自分なりに背中を伸ばす動きが見られた。学習時には、声をかけると自分でお尻を椅子の奥まで座り直す様子も見られた。

また、時間の指導での経過から、対象児は援助があれば背中を伸ばす動きが出しやすかったことがわかったため、学習場面で姿勢を整える際に、背中にやさしく触れてお尻の方に少し動かす援助を行うことを「手だて」として授業担当者だけでなく、関わる教員集団で共有した。対象児は教室場面で姿勢を整える際に、援助の動きがあることで背中を伸ばす動きが引き出しやすくなり、次第に援助量も減少していき、自分で気づいて背中を伸ばす動きや習慣を獲得してきた。また、関わる教員からも同様に対象児の変化についての発言が得られた。

4. まとめ

テーマを設定して自立活動の時間の指導を進めたことで、指導者は時間の指導での身体の学習と生活場面や学習場面とのつながりをイメージしやすくなった。これにより時間の指導における評価が、対象児の学習姿勢の評価と連動して、時間の指導の評価及びP D C Aのサイクルが生活・学習場面での評価と合わせて進めやすくなった。さらに指導集団の中で担当ではない教員についても子どもの変化を見とる一つの視点となり、教室場面での姿勢への関わりが主体的になってきた。

また、学習場面をテーマに取り入れたことで、対象児自身も生活場面への気づきが促され、時間の指導での姿勢の学習がどこにつながっているのかをイメージしやすくなったと考えられる。以上からテーマ設定による学習は、時間の指導の成果を教室とつなげる一つの工夫として意義があると考えられる。

ただし、小学生で特に低学年は生活上に明確な困りや問題意識を持っている訳ではなく、時間の指導で学習した経験や感覚を生活場面で使う、使えた経験と合わせてつながりを感じていくものとする。従って小学部段階では特に、教員が中学・高等部段階を見据えて教室と時間の指導をいかにつなぐ意識をもって関わるかが重要であると考えられる。

(文責 杉林寛仁)

Ⅲ. 実践事例 2 中学部—身体の学習をベースに行事等をテーマ学習に設定した自立活動の授業と学校生活をつなぐ実践事例—

1. 現状と課題

本校の中学生の多くは、テストや行事で疲れ、首肩や腰に痛みを感じているが姿勢の崩れにも気づきにくく、疲れへの対処方法は十分に身につけていない。教師は、自立活動の授業で疲れや痛みへの対応に追われている様子が伺える。しかし生徒たちは「腰が痛くならず長く勉強したい」「行事で自分の力を充分発揮したい」と願っている。

そこで中学部では、小学部での成長を踏まえ、自立活動の指導と学校生活とのつながりを意識できるように、見通しが持ちやすく繰返される定期テストや行事をテーマ学習のテーマとして取り上げて指導した。本稿では、本人が中学3年間の自立活動の授業を振り返って語ったインタビューの内容から自己理解を深め自己管理能力を高めるテーマ学習について考える。

2. 方法

(1) 対象生徒

- ・脳性マヒで肢体に不自由さのある中学生
- ・手動車いす自走可能で、教科学習を行っている
- ・疲れや眠さを慢性的に感じている
- ・順番に物事をとらえたり、考えたりすることが得意な一方、図形や地図で位置関係をとらえたり、複数の条件を総合的に考えていくことに課題がある
- ・見通しが持てないことへの不安や自分で方法を考えたりして試行錯誤することに課題がある
- ・好きなことへの興味は高い
- ・他者の輪に自分から入っていくことは少ないが、誰とでも隔てなく接することができ、良好な人間関係を築くことができる

(2) 方法

半構造化面接法による聞き取り調査を実施。質問事項は以下の通りである。

- ① 中学3年間の自立活動をふりかえってどうだったか。
- ② なぜそのようになったか、その理由はなんだと思うか。
- ③ 中1の頃はどうだったか。
- ④ 中2の頃はどうだったか。
- ⑤ 中3ではどうだったか。
- ⑥ 自己ケアの内容や方法、気を付けていることなど。
- ⑦ 自立活動の授業のテーマ学習では、定期テストにむけても取り組んできたが、3年間で振り返ってどうだったか。
- ⑧ 最後に中学3年間でまとめるとどんな感じだったといえるか。

表2 時間の指導における主な学習内容等

	テーマ学習(集団指導)	身体の学習(個別指導)
指導内容	行事等(定期テストや文化祭等)をテーマとし目標設定・実施・評価を繰り返し、集団で共有させる	動作法を活用して自己の心身の状態を自己評価し自己ケアの方法を学習させる
自己評価	テーマ学習シートを行事前に作成し、行事後に振り返る (自由記述と3段階評価)	中2の2学期より宿題チェック表(自己ケアの宿題の可否と心身の疲れや痛みのコメント記入)
主な学習の流れ	(10分)行事等前後で身体的心理的課題を挙げ目標設定し、具体的内容を考えスケジュールを立てて見通しを持つ。行事等後に振り返る。	(35分)①動作法のモデルパターン(あぐら座)の姿勢をてがかりに自己評価。 ②その日の状態に応じた学習内容(腕上げ、あぐら座での重心移動等) ③授業の前後での姿勢の変化を生徒が自己評価し学習成果を教師と共有

(3) 対象生徒の自立活動の時間の指導について

- ・自立活動の授業は週2時間(うち中1~3の各1時間を筆者が担当)
- ・指導目標は「生活の流れと自分の心身の状態へのつながりをとらえ、体の休め方や動かし方を学習し、自らの生活の中に生かすことができる。」(個別の指導計画より)
- ・指導内容、自己評価の工夫、主な学習の流れは表1

3. 結果

対象生徒が中学3年間の自立活動の授業をふり返り、筆者がインタビューしたものを表3にまとめる。

中学3年間の自己の課題は、成長期に伴う変形予防であり、ボディーイメージの修正であったと語った。その課題は今後も続くと認識しつつも、中学3年間で自立活動の授業でストレッチの方法を学び、その必要性を実感できたことにより、習慣化できたことが手術なく乗り切ることができたと言っている。

その必要性を痛感したエピソードとして2つの出来事を挙げている。1つめは、中学1年の夏休み明けに、円背が強くなったことである。原因として、小学部の頃と比べて座っている時間が長くなった中学校生活を挙げた。自立活動の授業で対策を考え、ウォーカー歩行の時間確保や座位保持装置機能付き椅子・車いすの使用など学校生活や補装具を見直した。また、授業内容も自分でできる自己ケアの方法を習得することを加えた。しかし、家でのストレッチは習慣化できなかった。中1の頃は、「ボディーイメージが確立しては崩れるを繰り返した」と語り、自立活動の授業がその確立に寄与していたことがうかがえ、身体の状態を意識できるようになり自己理解は進むものの、自己ケアの習慣化は難しかったようである。

もう1つの出来事は、中学2年の夏、学校代表として国際交流の機会が到来したとき、以前から韓国に興味を持っていた生徒Aは、大変意欲的に参加した一方で、心身ともに緊張した結果、普段できていたことができなくなるという日常生活動作にも影響を及ぼす事態となった。生徒Aは、これを機にストレッチを毎日実施することを決心した。この時期の少し前より、自己ケアの習慣化を望んで自立活動の授業で、自己ケアのチェック表(表3)をつけ始めていた。できなかった日は×印を付ければよいとした。また、一言コメント欄を設け、自立活動の授業だけでなく、身体の状態と日常的に向き合う機会を設けたこ

とが、生徒Aには適していたようである。自己ケアの習慣化には、自宅などで実施しようと思った時に、自己ケアの方法を身に付けていることが大切である。また、自己ケアをしてもその効果を実感できる、つまり自己評価できるまでに自己理解が至っていなければ習慣化できないと考える。

最終学年では、テーマ学習を活用して学校行事や定期テストと自立活動で学習したことを関連させて、身体の状態や自己ケアを意識できるようになった(図2)。状態に合わせた対策についても自己ケアできる状態と他者に依頼する状態とを整理(図3)し、実践できるようになった。自己理解が深まり、自己管理能力が高まったと評価できる。また、自己ケア時には、身体の傾きやかたさおよび身体の軸を意識することなど動作法でいう内的集中を高めている様子がうかがえる。自立活動の授業で学習したことをいかし、実践できていると考える。

つまり、中学1年では、中学生になり学校生活の変化に伴い変形や動きづらさを感じている内容となり、対策を講じているが、身体のケアは習慣化されなかった。中学2年では意欲的に行事に参加できたものの、それが原因で日常生活動作の後退をまねき、自己ケアの必要性を痛感した。そして、自立活動での身体の学習で習得した自己ケアの方法を実践的に習慣化できた。中学3年では、テストや行事に見通しを持って主体的に取り組み、身体の状態や自己の環境を自己評価し、振り返り、次回にいかすということができた。さらに日常生活の中で、自己ケアできる状態と教師や専門家に相談・依頼しないといけない状態とを、身体の状態を自己評価することにより判断できる力をも身につけた。

以上のことから、テーマ学習により振り返るきっかけを設けたことで、本生徒はそれらを繰り返すことを習慣化できたと考える。

表3 中学3年間の自立活動の授業の振り返り

① 中学3年間の自立活動をふりかえってどうだったか。
中1の頃は、側わんになってきて成長期をどう乗り切るかと身長が伸びてボディーイメージがついていなくて急に階段が降りられなくなったり、手足が伸びて普段当たらない所にぶつかったりして大変だった。けれど、今はボディーイメージを修正でき、側わんとは一生付き合うが、一番重要な時期を手術なく乗り切れたのがよかった。
② なぜそのようになったか、その理由はなんだと思うか。
自立活動でストレッチの方法を学んだのと、そのストレッチやることを習慣化できたことが大きい。最初は家でのストレッチはなかなかできなかったし、習慣づける気もなかった。しかし必要性を痛感し実感して習慣化できた。
③ 中1の頃はどうだったか。
中1の夏休み明け、特に背中が丸くなってきた。自分で背中が伸びない感じ『手術とかになったら、やばいなあ〜』と思った。原因は、中学生になって座っていることが多いからかな。小学部の時は身体のこと考えてウォーカーとか使用したけど、中学部では休み時間の5分減ったし、10分の休み時間は移動命。『ストレッチを!』という気持ちが強くなった。対策として、歩行の時間を確保するため、下校時に2階の教室から1階の玄関までウォーカーを使用した。他にも、車いすの背もたれを座位保持装置機能の付い

たものに交換したり、座位保持椅子のサイズが小さくなっていたので学校用と自宅用を作り直したりした。しかし、この後もボディーイメージが確立されては、また崩れてということを経験した。やらなければならないと思うが、家でのストレッチは習慣化できなかった。

④中2の頃はどうかだったか。

中2の1学期後半に、なかなか家でのストレッチができないので、自立活動の担当の先生(筆者)からチェック表をつけるよう勧められ、つけ始めた(表4)。自立の宿題(自己ケア)表で、自己ケアできたら○、できなかったら×チェックして、体調などについて一言コメント書くものである。最初の頃はできない日もあった。

そして中2の夏休みに、韓国交流に学校代表として参加したとき、緊張と興奮、楽しさで全身ガチガチ、背中が丸くなりすぎて、ひざが痛く伸ばせなく立てなくなった。腰も痛くなり、全身ボロボロだった。ボディーイメージが崩れて、昨日までできていたことができなくなる。階段で普通に降りれたのが手足の長さが長くなって色んなところでぶつかる。体重が重くなって動くのが怖い。自分の身体をどう収集していいのかわからない。そこで、一大決心『毎日ストレッチ』を決めた。

⑤中3ではどうかだったか。

自分の波が分かってきた。小学部の頃は行事後の対策はしていたけど、それほどひどくなかった。中学部の行事前後は詳細な波、かたさがつかめ、その対策もできるようになった。例えば、桐が丘祭(文化祭)の前後の1週間は全身ボロボロ。対策として、自分でストレッチすると先生に授業でケアしてもらうことをして、前日には接骨院へ行く計画を立てた(図2)。自己ケアできる状態と依頼しないとだめな状態がわかるようになった(図3)。ひざが伸びにくくなる。ひざは自分でケアできる。股関節と足首にくる。股関節は自分でできる。背中が丸まってる感じ(伸びない)。背中と腰にきたらやってもらわないと無理で、自立活動の授業で先生にお願いしたり、接骨院に行ったりする。頭が首の上ののっていない感じになると、集中訓練会などで集中的にやらないと無理。

⑥自己ケアの内容や方法、気を付けていることなどを教えてほしい。

腕上げをするときは、身体の軸がずれていないか、身体の傾き・かたさ(緊張)、腕をまっすぐのばすことができるか。前屈をするときは、身体の軸がずれていないか、身体の傾き・かたさ(緊張)、まっすぐ前屈できているか。足のばしをするときは、身体の軸がずれていないか、身体の傾き・かたさ(緊張)、足をまっすぐのばすことができるか。膝のかたさ、内転がひどいかどうか。

⑦自立活動の授業のテーマ学習では、定期テストにむけても取り組んできたが、3年間を振り返ってどうかだったか

テスト前後は、とても疲れた。運動会の疲れとは違っていた。中1の頃は、中間・期末の勉強は、時間で区切って勉強習慣をつけた。しかし、何をすればいいかわからず作業になってしまった。そこで、先生のおっかけが一番!勉強の仕方とわからないところを聞く。次第に時間ではなく、『これをやったら』というように勉強内容や自分に合ったやり方を見つけ、見通しを持って計画を立てられるように変わっていった。中3では、

最終的目標を決めて逆算して「今これをやらなければ」と考えるようになった。『こうなりたいなら、今何するの?!』というふうを考えられるようになった。受験に対しても、直前の体調不良で最後の追い込みができなかったけど、その中でも受験を乗り越えられたのはよかった。

⑧最後に中学3年間をまとめるとどんな感じだったといえるか。

要は自分と向き合えるようになった。身体的にはかたいが、それはそれで確立して生きていける。

表4 自己ケアチェック表

	足のはし ○×	腕上げ ○×	前屈 ○×	メモ(感想)
1/11(月)	○	○	○	肩がこらない
1/12(火)	○	○	○	"
1/13(水)	○	○	○	首がかたい
1/14(木)	○	○	○	"
1/15(金)	○	○	○	背中もかたい
1/16(土)	○	○	○	"
1/17(日)	○	○	○	肩がかたい
1/18(月)	○	○	○	"
1/19(火)	○	○	○	首がこたない
1/20(水)	○	○	○	"
1/21(木)	○	○	○	背中がかたい
1/22(金)	○	○	○	全身ホロホロ
1/23(土)	○	○	○	"
1/24(日)	○	○	○	ツレくなった
1/25(月)	○	○	○	"
1/26(火)	○	○	○	腰が痛い
1/27(水)	○	○	○	全身ホロホロ(発作)
1/28(木)	○	○	○	全身白目にくしくぼんやり
1/29(金)	○	○	○	全身ホロホロ(発作)
1/30(土)	○	○	○	全体的にツレなくなった
1/31(日)	○	○	○	"
2/1(月)	○	○	○	"
2/2(火)	○	○	○	体を伸ばせるようになった
2/3(水)	○	○	○	"
2/4(木)	○	○	○	"
2/5(金)	○	○	○	"
2/6(土)	○	○	○	車庫を作ることかた
2/7(日)	○	○	○	"

1. ひざが伸びにくくなる→ひざは自分でケアできる。
2. 股関節と足首にくる→股関節は自分でできる。
3. 背中が丸まっている感じ(伸びない)→背中と腰にきたらやってもらわないと無理
4. 頭が首の上ののっていない感じ→集中訓練会などで集中的にやらないと無理

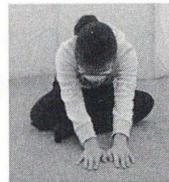
図3 自己ケアできる状態と依頼する状態

腕上げをするときのチェック項目



- ・身体の軸がずれていないか
- ・身体の傾き
- ・身体のかたさ(緊張)
- ・腕をまっすぐのばすことができるか

図4 腕上げをするときのチェック項目



前屈をするときのチェック項目

- ・身体の軸がずれていないか
- ・身体の傾き
- ・身体のかたさ(緊張)
- ・まっすぐ前屈できているか

図5 前屈をするときのチェック項目

足のばしをするときのチェック項目



- ・身体の軸がずれていないか
- ・身体の傾き
- ・身体のかたさ(緊張)
- ・足をまっすぐのばすことができるか
- ・膝のかたさ
- ・内転がひどいかどうか

図6 足のばしをするときのチェック項目

桐が丘祭(文化祭)

1. 目標 なりたい自分 評価

・疲れを引きずらない自分	×
・文化祭週間でも家庭学習ができる自分	△

- ◎身体のケア
- ・前後のケア
- ・疲れ対策
- ◎道具や人の支援
- ・車いす
- ・机やいす
- ◎スケジュール
- ・時間
- ・休憩

2. 内容 具体的にやること 評価

・ストレッチをする	○
・前日などに整骨院に行く	○
・文化祭週間は早く寝る	×

3. 計画 スケジュール

10/31	学習発表会→練習→昼食→練習→14:30発表→解散
11/1	練習(休けい・見回る)→昼食→練習→13:10発表→休けい(見回る)→反省会→解散
振り返り	前日に整骨院行ったおかげで、体はバリバリにならなかったがいつもと違う疲れが出てしまい、風邪を引いてしまった。

図2 テーマ学習シート(文化祭の例)

5. 考察

本生徒は身体の学習を通して、姿勢について自己評価する力や自己ケアの方法を身につけた。これらの力をテストや行事に活用し、自ら対策を講じ実施し振り返るというPDCAサイクルを繰り返した。すると日常的な疲れや動かしにくさへの気づきにつながり、自己ケアの習慣化及び必要な支援を求める力を身につけた。つまり身体の学習を基軸に、見通しが持ちやすいテストや行事をテーマとしたテーマ学習により、本生徒が主体的にPDCAサイクルを回せるようになったことが、自己理解の深まりや自己管理能力の高まりにつながったととらえられる（図7）。肢体不自由のある中学生におけるキャリア教育の要とも考える。

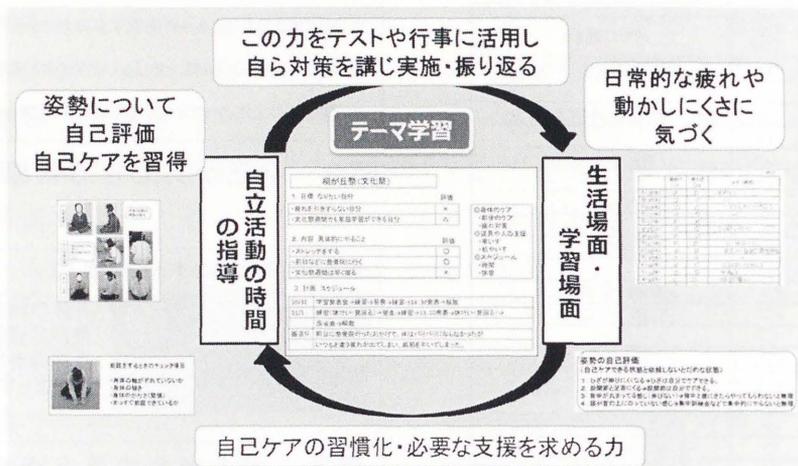


図7 自立活動の授業と学校生活をつなぐテーマ学習

6. 参考文献

- 1) 文部科学省 (2016). 教育課程部会特別支援教育部会第5回資料5, 自立活動の改善・充実の方向性 (検討素案)
- 2) 村主光子・松本美穂子 (2014). 動作法を活用した自立活動の指導の実践IV—中学部における自立活動の時間の指導の実践事例一, 筑波大学附属桐が丘特別支援学校研究紀要第50巻, 84-89
- 3) 日本脳性麻痺の外科研究会 (2010). 成人脳性麻痺者の健康調査報告書, 日本脳性麻痺の外科研究会事務局

(文責 村主光子)

IV. 実践事例3 高等部—職場実習と自立活動の時間を関連させ、主体的に自己理解を深めていく取組—

卒業後の進路先では、高等部までのように自分の障害等による難しさや必要な配慮についてよく知っている人は周りにはほほいさない。そのため、何か困っていることがあったときに必要な配慮を周りから差し出してくれることはほとんどなく、自分から周囲に対して働きかけていかなければ必要なサポートが得られにくいという現実がある。そのため高等部では、「自己の障害等による困難さについて周囲に理解してもらい、必要な配慮を受けられるように自分から発信していける力」を育成することが大切となってくる。そこで、テーマを設定した学習を通じて、自立活動の時間の指導と卒業後の生活をつなげ、生徒自身で自らの課題に気づき、その解決に向けて考える中で、上記の力を育むことに取り組んでいる。

1. 対象児

脳性麻痺アテトーゼ型で電動車いす使用。学習上、生活上の困難としては、姿勢の崩れやすさにより体に疲労がたまりやすい、手指の動かしにくさにより作業に時間がかかる、口まわりの動かしにくさ（構音、涎等）により周囲と円滑なコミュニケーションがとりにくい等がある。

2. 指導の流れ

(1) テーマの設定

職場実習に向けて、自立活動の時間の中で図8のテーマを学年全体に提示した。内容としては、「体に疲れがたまったときにどうすればケアできるか」「介助の仕方や補装具の扱い方をどのようにうまく相手に伝えていくか」「自分が作業しやすい姿勢をどうすれば整えられるか」「自らの認知特性についてどのように理解してもらおうか」等の観点を示している。この観点を参考に、自己の学習上や生活上で困っていることを振り返り、実習先で必要な配慮を整理したり、それを分かりやすく説明したりするための方法を検討した。なお、自立活動の時間の指導では、困難を改善するために、テーマを設定した学習で支援依頼の内容を整理する時間と、生徒個々の課題自体に取り組む時間とのバランスを取り、両者の関連を図りながら進めている。

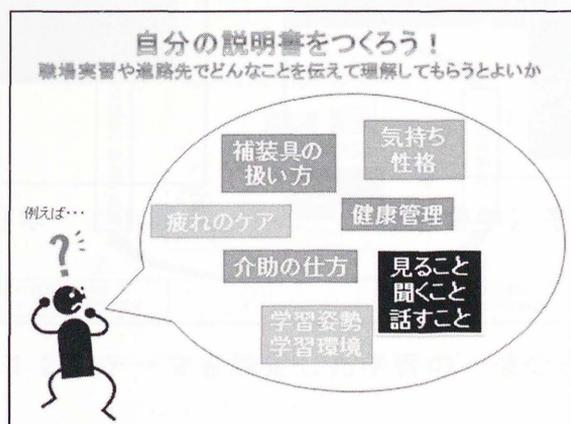


図8 職場実習に向けたテーマ

(2) 指導の経過

平成26年度3学期（高等部1年次）。自立活動の時間の指導の中でテーマを学年全体に説明し、全生徒と指導者全員で共有した。その後、それぞれの担当に分かれ、生徒と指導者の1対1で、次年度の職場実習に向けて、自分の障害等による学習上、生活上の困っていることと必要な配慮について振り返った。対象児については、口周りの動かしにくさによるコミュニケーションの取りにくさと、聞き取れない場合の対処の仕方をまとめた(図9)。

会話について

私は発語が苦手です。なので、聞き取れない時もあるかもしれません。

以下はそんなときの対処法です。

- ① 2、3回、言いたいことをそのまま言います。
- ② (それで伝わらなかった場合は)他の言葉で言います。
- ③ (それでも伝わらなかった場合は)iPadなどのOA機器か紙に書くなどして伝えます。

図9 コミュニケーション場面での様子

平成27年1学期に職場実習先の希望調査を実施。本人から都内区役所障害福祉課の希望が出た。希望先は当校からの依頼は初めてであり、かつこれまで他の学校からも肢体不自由生徒を受け入れたことがなかった。そのため、まずは受け入れの可否を判断するために生徒の様子を教えてほしいと言われた。そこで、1年次にまとめた図9の資料に加え、トイレや車いすでの移動は自立していること、姿勢の崩れを軽減させるために学校では座位保持いすを使用していること(図10)、パソコン操作の様子(図11)等を自立活動の時間で整理し、これらの情報と個別の教育支援計画の情報を合わせて学校から実習担当者へ伝えた。

普段は本人用の机とイスで学習している
車いすのまま学習や作業することも可

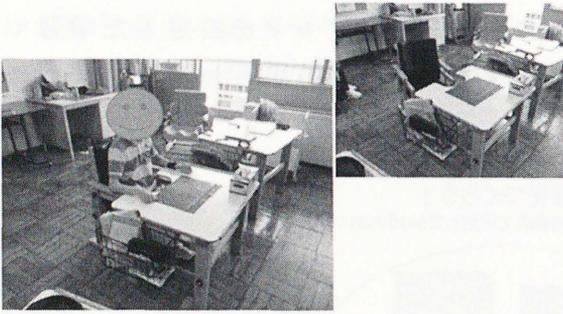


図10 学校での様子(学習環境)

学校でのパソコン作業はデスクトップ型PC
特別な入力機器は使用していない

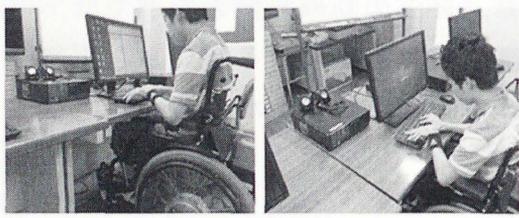


図11 学校での様子(パソコン)

本人の様子をおおむね理解していただき実習の受け入れが決まった。合わせて、実習担当者から、「紙は折れるか」等について質問を受けた。そのため自立活動の時間の中で、紙を上手く折るために、手指の動かし方の練習やすべり止めシート等の環境面の工夫に取り組みながら、自分に適した方法を考えた。その他、疲れが出てきた場合に、実習昼休みに車いすから降りて体を伸ばしてもよいか、伸ばす場所はあるかどうかを確認したいと考えた。

平成27年11月に本人、担任、実習担当で職場実習事前面談を行った。実習内容はチラシを数える作業ということが分かり、自分が作業を円滑に行えるようにすべり止めシートを持参したいと本人から伝えることができた。また、パソコン入力作業にも取り組むことが分かり、パソコンや机等の作業環境を見学する中で、自分が普段使用しているマウスや持参したいということも本人から伝えることができた。さらに、休憩場所についても質問ができ、昼休みに使ってよいことを確認できた。その他実習中に配慮が必要なこと(チラシに涎がついた場合の対応、発作時の対応、誤嚥時の対応)については、今後は本人から発信していけることを期待しながら、担任から実習担当者へ確認を進めた。

実習は平成28年1月に3日間実施した。実習反省会では働く態度はもちろんのこと、事前に確認していた配慮事項に関することも振り返った。報連相をする際に聞き取りにくさや時間がかかることについては、遠慮せずに何度も聞いてもよいことや、口頭が大変な場合は、メールで送る、wordで代筆するという方法も提案いただいた。また、会議へ参加した際は資料をめくることが難しく、話し合いに参加しにくいという経験をし、今後はデータで事前に資料を送ってもらう等、資料の提供の仕方も自分に合った方法を伝えられるとよいと助言をいただいた。今まで自分で気づけなかった新たな方法を学ぶことができ、今後に向けて貴重な意見をいただけた。

実習後は、自立活動の時間の指導で、職場実習に向けて取り組んできたことをまとめて発表する機会や、他の生徒の取り組みの様子を聞く機会を設けた。一連の流れを通して、障害等による自己の困難を改善するために、自ら工夫して環境を整えたり、周囲の人に配慮を求めたりすることで、持てる力をしっかり発揮できるという理解を深めることができた。合わせて、口まわりの動きにくさ等という自己の困難自体の改善の必要性が実習を通してより明確に理解され、課題に対して主体的に取り組む様子が見られるようになった。

これまでの流れをまとめると図12のようなサイクルとなる。

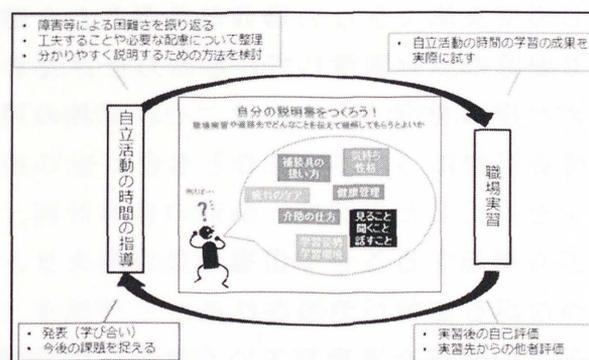


図12 テーマを設定した学習の一連の流れ

3. まとめ

今回の実践により、生徒自身が障害等による学習上、生活上の困難を振り返るとともにその改善する方法を検討し、実際の社会の中で試し、結果を評価するサイクルを回すことで、主体的に自己理解を深めることができた。さらに、必要な配慮を自ら発信していくという卒業後に求められる力を生徒自身が意識することにもつながった。

生徒の自己理解促進に向けて、ねらいを持って指導していくためには、まずは指導者自身が担当生徒の困難を捉えられることが必要である。そこで重要なのが個別の指導計画である。学校生活上での困難と必要な配慮についてまとめられた個別の指導計画を参考にすることで、テーマを設定した学習での指導効果が高まっていくことになる。よって、個別の指導計画のPDCAサイクルを機能させることも合わせて取り組んでいく必要がある。

今回の実践では、自己の困難を改善するために、自ら工夫して環境を整えたり、周囲の人に依頼したりすることを、学校外の環境で行ったが、これが学習として成立するためには、その前提となる力を段階的に指導していくことが必要である。

まずはじめとしては、身体の指導によりリラックスできる経験や動かしやすくなる経験を積み重ね、学習場面や生活場面でできることを増やしていく段階がある。すると、自己の困難を改善する目的や必要性を実感し、意欲的・主体的に困難を改善しようとする態度につながっていく。

こうした実感や態度をしっかりと土台として作り上げながら、次は、学校の様々な場面での困難を改善するために、自ら工夫して環境を整えることや周囲に依頼することを試行錯誤していく。最初は、様々な場面を過ごす中で自己の困難に気づくことから始まる。実際にやってみて、自分にできることとできないこと、自分がやるべきこと等に気づいてその場で対応することを繰り返していくことで、次第にどのような困難があるかを事前に予測できるようになり、自分にどのような配慮が必要なのか見通しを持ち、計画的に準備していけるようになる。自己の困難についても身体面のみでなく健康面、認知面等にも視点を広げていく。さらに他の人の改善方法や福祉機器・制度などを聞いて取り入れることを通じて、役立つ情報を自らつかみ取っていく態度を育成することも必要になってくる。

そのうえで、これまで身につけてきたことを活かし、学校外でも自分の困難や必要な配慮を分かりやすく説明していく段階を迎える。ここでは、学校で行っている配慮は学校の人員・時間・広さ・道具等の環境の中で実施できていること、異なる環境では学校で行っている配慮をそのまま同じ形で実施できない場合があることを理解していくことが重要であり、その環境に合わせて配慮の形を調整している能力を育成することがねらいとなる。

このように段階を踏まえた指導を行うためには、それぞれの段階で必要な知識、技能等について研修を通じて指導者が身につけていくことも合わせて必要である。

以上のことより、テーマを設定した学習は、個別の指導計画、段階を押さえた指導、研修と密接に関連し合いながら実施することで指導効果が高まり、さらに教師の専門性の向上にも寄与することにもつながることが予想される。

最後に、卒業後の進路先での配慮を実現していくためには、生徒自身からの発信は不可欠だが、それと合わせて、学校の個別の教育支援計画の活用や移行支援のコーディネートも非常に重要であり、それらが機能するための在り方を検討していく必要がある。

(文責 佐々木高一)

V. 終わりに

当校では「教室でいきる自立活動」を目指して実践を積み重ねてきた。これは自立活動の目標である「学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い・・・」を「時間の指導」と学校生活の学習場面と結び付けてサイクルすることで、効果的に児童生徒に達成させることを目指したものである。また一方で、教師の専門性の継承や向上のためのシステムの1つとしても機能していた。

自立活動の「時間の指導」では、指導目標や指導内容やその評価が「時間の指導」の中だけで、完結していることが多い。その結果、学校での日常的な生活場面や学習場面とつながりがイメージしにくく、前項で挙げたように、かえって目標や内容や評価には高い専門性が求められる傾向が強くなる。桐が丘では、専門性を継承していくためには、教師が主体的に学び続けることが最も大切であると考えてきた。教師が主体的に学び続ける条件は、子どもの変化をみとることができ、そこから自分で仮説を立てて、授業に臨むことであることがアンケート調査等から明白になっている。特に肢体不自由教育経験3年未満の教員に場合には、子どもの変化について気付くのは、「時間の指導」の場面ではなく、学校生活や自立活動以外の教科や領域等での指導場面においてであった。教室場面での子どもの変化の気づきと「時間の指導」が結びついてサイクルとして考えられるようになることが教師の主体的な学びの動機づけとなる。

そこで、当校では、教室場面での子どもの変化の気づきと「時間の指導」が結びつくサイクルを実感できるよう、自立活動の「時間の指導」において、「テーマ」を設定して、「教室でいきる」自立活動を目指してきた。「テーマ」は前項にあるように4つをメインテーマとして、小中高の発達段階や各グループの持つ課題に対して、時期に応じて、さらに細かく設定した。「テーマ」は学校のさまざま生活場面や学習場面に散りばめられている。自立活動の「時間の指導」の評価や効果測定は生活場面や学習場面でも行われることになり、「テーマ」を意識することで教員も「教室でいきる」自立活動の実践に向かうことができた。

しかし「教室でいきる自立活動」を目指した、「テーマ」を設定した「時間の指導」では、その子どもの自立活動における中心的な課題より、日常的な課題だけにとらわれてしまう傾向があるために、研修機能を活性化させるための仮説の項で取り上げた3項目【授業のための個別の指導計画（日常的なPDCAサイクルを回す）】【授業中での教師同士の「学びあい」】【指導法について体系的の学ぶ継続的な研修】のすべてを機能させる必要があった。この3項目が機能することで、「時間の指導」の「テーマ」がいきってきて、教室場面での子どもの変化の気づきと「時間の指導」が結びついてサイクルとして考えられるようになる。

研修機能を活性化させるためには「教室でいきる自立活動」という視点が必要であり、「教室でいきる自立活動」を機能させるためには、前項でまとめた「自立活動の専門性の継承のための観点」を学校組織として行う必要がある。

また小学部、中学部、高等部で各部の特性を考慮しながら、コンセプトとしては一貫して設けられたテーマは、キャリア教育の4領域【1意思決定能力】【2情報活用能力】【3人間関係形成能力】【4将来設計能力】に関連している。

キャリア教育は「卒後とか十年後を想定して、段階的に学ぶ」とか「卒業後に役立つ力」「大人になったときに必要な力」という視点で取り上げられることも多く、そのために教員とっても児童生徒にとっても、とらえにくいものと考えやすい。学校での日常生活場面や学習場面に散りばめられた「テーマ」に対応することがキャリア教育につながるという視点でとられると、実感をもって実践できる。自立活動の「時間の指導」と「キャリア教育」の繋がりが日常的に実感できれば、教師が主体性をもって学び続ける動機づけはさらに強くなると考える。

引用文献・参考文献

- 1) 村田茂(2010), 自立活動における教員の専門性. 肢体不自由教育197, 2-9
- 2) 筑波大学附属桐が丘特別支援学校編(2008)肢体不自由教育の理念と実践, ジアース教育
新社

(文責 城戸宏則)